

目を合わせたコミュニケーション、手話の魅力

修士 1 年 鈴木隆子

笑顔で感情豊かに話される相良先生がとても魅力的でした。そして、相良先生の手話を瞬時に通訳してくださる手話通訳士山口さんのおかげで、手話での講演というハンディを全く感じない講義でした。

叔父は 50 代で病気のため難聴となり、筆談と手話で会話をします。手話のできる家族は手話も交えて私たちの話を通訳してくれます。しかし、聴こえる家族だけで会話しているときの叔父は寂しそうな表情をして手持無沙汰の様子です。「何?」と聞いてくる時もあります。

叔父との会話の時は注意するのですが、つい通訳を忘れてしまうのです。気を付けなければと反省です。

「私のことなのに、私以外でみんな話進めて、勝手に進められて、すごく悲しかった。自分のことなのに自分が一番わからなくて、こういう一番悲しい。私のことなんだから勝手にきめないでよ。」

聞こえなくなっても約 1 ヶ月後の涙で濡れていたページに相良さんが書いたことは、すべての障害を持つ人たちの気持ちです。急に障害を持つことになった中途障害の方には障害を持つ前と後の状況の違いを強く感じると思います。そんな時こそ、同じ障害を持つ仲間のピアサポートが大切になることでしょう。

その後、手話と出会い、筑波技術短期大学に入学したことがきっかけとなり、聴覚障害学生の障害認識の研究を始め、ツアーコンダクターを経て手話言語学研究者の道を歩んでいらっしゃいます。

相良先生の半生は、私が修士研究として取り組んでいる故・谷口明弘さんと重なりました。幼少期からの脳性麻痺と中途障害の難聴という違いはありますが、谷口さんも、ダスキンのリーダー養成奨学金にてアメリカに留学し、当事者として研究者の道を歩まれました。

人との出会いが人生を変える大きなきっかけになっています。

欧米では大学で手話通訳養成課程があるのに、日本ではボランティアとして手話通訳を頼むなどまだまだ手話通訳養成の仕組みが確立されていません。

日本でもろう者への合理的配慮(他の障害も含め)が色々な場面で当たり前に行われるとともに、目を合わせたコミュニケーションである手話の魅力が、もっと社会に認められることを願っています。

ありがとうございました。